

かなでほんちゅうしんぐら

## 仮名手本忠臣蔵

### 〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。

八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

## 《大序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

## 《二段目》

桃井家の奥座敷。若狭之助は、家老・加古川本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。

## 《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

「おのれ師直、真二つ」と意氣ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかつた。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であつた。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰つたと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかつたことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

#### 《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来る。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良之助が駆けつける。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶える。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡す。

#### 《五段目》

山崎で獵師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建

立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追った。

### 《六段目》

勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。(身売りの段)

そこへ獵人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできた。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出る。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣いた。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来た。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えた。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語る。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかる。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶える。

## 《七段目》 一カ茶屋の段

大星由良之助は祇園の一カで遊蕩に耽っていた。血氣の若侍が煽っても、足輕の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれている。そこへ由良之助の息子・カ弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来る。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からは、おかるが盗み読んでいた。由良之助はそれに気づき、おかるの身請け話をきめる。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話聞くうちに由良之助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとする。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良之助があらわれ、平右衛門にはお供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせる。

## 《八段目》

如古川本蔵の娘・小浪は、由良之助の息子・カ弥と許嫁の仲であった。由良之助一家が山科に住んでいること知って、継母・戸無頼と二人きり、供も連れず山科へと旅を続ける。

## 《九段目》

雪の山科、由良之助の閑居へ、戸無頼と小浪が到着する。由良之助の妻・お石は愛想良く出迎えるが、賄賂を贈るような追従者の娘と、二君に仕えぬ由良之助の大事な子とは釣り合わない、破談を言いわたす。思い余った母娘が死のうとするのをお石は止めて、祝言をさせたければ本蔵の首をと所望する。本蔵が抱きとめたば

かりに、判官は本望を遂げられなかった。その恨みの本蔵の首を婿引出にと迫る。母娘が再び途方にくれる所へ虚無僧姿に身をやつした本蔵が現れ、わざと力弥の手にかかる。本蔵の本心を見ぬいた由良之助に小浪の祝言を頼み、師直屋敷の絵図面を渡して死んでゆく。

### 《十段目》

堺の商人・天河屋義平は、召し使いも女房もよそへ出し、一人で討入りの諸道具を調達している。由良之助は、同士の疑念をはらすため、同士を捕手として入りこませ、義平を糾明するが、頑として明かさない。由良之助はそれを賞して「天河」を討入りの際の合い言葉と決め、鎌倉へと向かう。

### 《十一段目》

一同は、稲村ヶ崎に上陸し、雪の中、鎌倉の師直邸の討入る。由良之助は、判官形見の短剣で師直の首をかき、亡君の位牌に供え、焼香する。一同は、菩提寺光明寺へと引き上げる。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

# 身売りの段

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、結ふに言はれぬ身の上を、誰にか柘植の水櫛に、髪の色艶梳き返し、品よくしやんと結ひ立てしは、在所に惜しき姿なり。母の齢も杖つきよわいの、野道とぼとぼ立ち帰り、

「オ、娘、髪結ひやつたか。美しうよう出来た。イヤもう、在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も藪隙で若い衆が麦かつ歌に、『親父出て見やば、ん連れて』と唄ふを聞き、親父殿の遅いが気に掛り、在口まで行たれど、ようなう影も形も見えぬ」

「サイナ、こりやまあどうして遅い事ぢや。わし、一走り見て来やんしよ」

「イヤノウ、若い女子一人歩くは要らぬ事。殊にそなたは小さい時から在所を歩くことさへ嫌ひで、塩谷様へ御奉公にやつたれど、どうでも草深い処に縁があるやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬ」

「オ、かゝ様のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの、在所はおろかどんな貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて盆になつて、『とさま出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたつた二人、踊り見に行きやんしよ。かゝさん、お前も若い時覚えがある」

と、差し合ひくらぬぐわら娘、気もわさわさと見えにける。

「イヤノウ、なんぼその様に面白をかしよう言やつても、心の中はの」

「イエイエ、済んでござんす。主のために祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄つて父さんの世話やかしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど兄も塩谷様の御家来なれば、外の世話する様にもない」

と親子話の中道伝ひ。駕籠を昇かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

「エ、コウツト、確かこの松の木から、一軒、二軒、三軒目。オ、こゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば、

「これはく遠い処を、ソレ娘、煙草盆、お茶あげま

しや」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主、

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬか。ハテ面妖な。ハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、こ

の中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打った。これの親父

が言はるゝには『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晚証文を認め、百両の金子きんすお貸しなされて下され』

と涙をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き換への契約。何がその五十両渡すとの、

喜んで戴き、またまた言ふて戻られたはもう、四つで



もあらうかい。夜道を一人金持つてゐらぬものと、留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せきと戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「イヤイノ、コレ／＼合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。せんさくこつちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去の」

と、懐より金取り出だし、

「跡金の五十両、これで都合百両。サア渡す、受取らしやれ」

「お前、それでも親父殿の戻られぬ中は、のうかる、わが身はやられぬ」

「ハテぐづぐづ／＼と埒の明かぬ。コレ、ぐつともす

つとも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわいの、これ証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へばれこづゝ違ふ。どうでかうせざ濟むまい」

と手を取つて引立つる、

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け、無体に駕籠へ押し込み押し込み、鼻きあぐる門の口。鉄砲に養笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り、

「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」

「オ、勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず、

「どうでも深い訳がある。母者人、女房ども、様子聞かう」

とお上の真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハ、ア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。いや

も、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、親父の印形あるからは、こちには構はぬ。早う奉公人を受取らうかい」

「オ、婿殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調べて進ぜたいと、言ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親父どのの言はしやるには、ひよつとこなたの氣に、女房売つて金調へ様と、よもや思ふてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつその与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売らう、まさかの時は切取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調べておましたら満更腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極はめに往て、今に房らしやれぬ故親子案じて居る中へ、親方殿が見

へて、昨夜親父殿に半金渡し跡金の五十両と引き換へに、娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上と訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるところ、どうせうぞ、勘平殿」

「ハ、これはこれは、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがこちにもちつとよい事があれども、マアそれは追つて。親父殿も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とはまた何故に、とは何故に」

「ハテ、いはゞ親なり判がゝり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「ア、これいのこれ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言ふて済むものかいの、コレ済むかいの。またその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭にくるくると巻いて懐に入れらるゝ。『ア、そりや危な

い危ない／＼。これに入れて首に掛けさつしやれ』と、

俺が着てゐる、コ、ココ、この単物ひしえものの縞の切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう」

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オ、てや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハツ』と勘平が肝先にひしと堪へ、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞。『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは男であつたか、ハア、ハツ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ、とは知らずして女房

「コレこちの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さいせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいか」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「ア、イヤイヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてはつかり」

と言ふに文字も凶に乗つて、

「それを見みいなどどうぞすえ。七度尋ねて人疑へぢや。親父の在り所の知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともにでんど沙汰。マアマアさらりと済んでめでたい、めでたい、ハ、ハ、ハ、ハ。お袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サアサアお娘、早ふ駕籠に乗りや／＼」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。

年寄つた二人の親達、どうでこなさんの皆世話。取り

分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ、

『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』

と、心を痛め堪へ居る。

「オ、婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そな

たに未練な気も出よかと思ふての事であらう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、

悲しうもなんともない。わしや勇んで行く、母さん、

したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろ

ぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てた

も、ヤ

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ、ヤ、ヤ。鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにも

よいか。ソレとばつて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

「なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る

事ぢや」

と、齒を食いしぼり泣きければ、娘は駕籠にしがみつ

き、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返

る。情なくも駕籠早き上げ、道を

(早めて急ぎ行く)

# 一力茶屋の段

へ花に遊ばゞ祇園あたりの色揃へ、東方南方北方西方、

弥陀の浄土か光ひかゝ、光輝く奥座敷、ワイ／＼ワ

イトナ

「弥五郎殿、喜多人殿。これが由良助殿の遊び茶屋、

一力と申すのでござる。誰そちよと頼みたい」

「アイアイどなさんぢやえ」

「イヤ、我々は金星殿に用事あつて参つた。奥へ往て

言はうには、『やま矢間十太郎、千崎弥五郎、竹森喜多人で

ござる。この間より節々迎ひの人を遣はしますれども、

お帰りのない故、三人連れで参りました。ちと御相談

申さねばならぬ儀がござる程に、お逢ひなされて下さ

れ』と、きつと申してくりやれ」

「それは何とも気の毒でござんす。由良さんは三日  
このかた以来飲み続け、お逢ひなされてから他愛はあるまい。

本性はないぞえ」

「テさてマア、さう言ふておくりやれ」

「アイ／＼」

「弥五郎殿、お聞きなされたか」

「承つて驚き入りました。初めの程は敵へ聞かする計

略と存じましたが、いかう遊びに実が入り過ぎまして、

合点が参らぬ」

「何とこの喜多人が申した通り、魂が入れ替つてござ

ろうがの。いつそ一間へ踏込み」

「ア、イヤイヤ、とくと面談致した上」

「成程、しからばあれに相待ちませう」

「手の鳴る方へ／＼」

「捕らまよ／＼」

「由良鬼や待たい〜」

「捕らまへて酒飲まそ〜。コリヤ捕らまへたわ。サ、酒々、銚子持て、銚子持て」

「イヤコレ由良助殿、矢間十太郎でござる。こりや何となさる〜」

「南無三、仕舞うた」

「オ、気の毒、何と栄さん、ふし食た様なお待さん方、お連れさんかいな」

「さあれば、お三人とも恐い顔して」

「イヤコレ女郎達、我々は天星殿へ用事あつて参つた。暫く座を立つて貰ひたい」

「そんな事でありそなもの。由良さん、奥へ行くぞえ、お前も早うお出で。皆さんこれにえ」

「由良助殿、矢間十太郎でござる」

「竹森喜多人でござる」

「千崎弥五郎御意得に参つた、御目、覚まされませう」

「これは打ち揃うてようお出でなされた。ガ何と思つて」

「鎌倉へ打立つ時候は、何時頃でござるな」

「さればこそ。大事の事をお尋ねなれ。かの丹波与作が歌に、江戸三界へ行かんして、ハ、ハ、ハ、御免候へ、たわいたわい」

「ヤア酒の酔に本性違はず、性根が付かずば三人が、酒の酔ひを、醒ませませうかな」

「ヤレ聊爾りょうじなされまするな。憚りながら平右衛門め、それへ参つて只一言、申し上げたき儀がごわります。

暫く、暫く、暫く、お控へ下さりませう。由良之助様、寺岡平右衛門めでござります。御機嫌の体を拝しまして、如何ばかり大悦に存じ奉ります」

「フウ、寺岡平右衛、寺岡平右衛とは、エ、何でえす

か。前かど北国<sup>ほくごく</sup>へお飛脚に行かれた、足の軽い足輕殿か」

「ネイ、／＼、左様でござります。殿様の御切腹を北国にて承りまして、南無三宝と宙を飛んで帰りまする道にて、御家も召し上げられ、一家中散り散り、と承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ、御恩は変らぬ御主の仇。おのれ師直めを一討ちと鎌倉へ立ち越え、三ヶ月が間非人となつて付け狙ひましたれども、敵は用心敵しく近寄る事も叶ひませず、所詮どん腹かつさばかん、と存じましたが、ふと国元の親の事を思ひ出しまして、すぐらすごら帰りました。所に、天道様のお知らせにや、いづれも様方の一味連判、石碑、御建立の様子承りまして、ヤレ嬉しや有難やと、取る物も取り敢へず、あなた方の御旅宿を訪ね、ひたすらお頼み申し上げましたれば、『ム、出かいた、うい奴ぢや。お

頭へ願つてやろ』とお詞に縋りまして、これまで参上仕りました。サ師直屋敷の」

「ア、来いよ、／＼、／＼。コレ」

「ネイ」

「コレ」

「ネイ」

「コレコレコレ」

「ネイ」

「ア其元は足輕ではなうて、大きな口輕ぢやの。何と幫間<sup>たいごま</sup>なされぬか。尤もみたくしも、蚤の頭<sup>むしこ</sup>を斧で割つた程無念なども存じて、四五十人一味拵へて見たが、味な事の。よう思うてみれば、仕損じたらこの方の首がころり、仕畢せたら後で切腹。どちらでも死なねばならぬといふは、人參飲んで首括る様なもの。殊に其元は五両に三人扶持の足輕」





御酒でも無理に参らずば、これまで命も続きますまい。

醒めての上の御分別」

と、無理に押へて三人を、伴ふ一間は善悪の、明りを照らす障子の内、影を隠すや

月の入る。山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力

弥、内を透かして正体なき父が寝姿、起こすも人の耳

近しと、枕元に立ち寄つて、轡に代はる刀の鏗音、鯉

口

「お竹、お松は居ぬか。水を持つて来いよ、誰れもゐ

ぬか。そろそろ庭へ降りて酔ひ醒まし。ヤア力弥か、

鯉口の音響かせしは急用あつてか、密かにく」

「只今御台顔みだいかおよ様より急の御飛脚密事の御状」

「他に御口上はなかつたか」

「敵……」  
かたき

「へ敵と見へしは群れ居る鴟、時の声と聞こへしは。

ア、大きな声ぢや、密かに密かに」

「敵高師直、帰国の願ひ叶ひ、近々本国へまか罷り帰る。

委細の儀は御文との御口上」

「よし、よし。その方は宿へ帰り、夜の中に迎ひの駕

籠。行けく」

「ハ、」

はつとためらふ隙もなく、山科さして引返す。

「まづ様子氣遣ひ」

と、状の封じを切る所へ

「大星殿、由良助殿、斧九太夫でござる。御意得ませ

う」

「ヤこれは久しや久しや。一年も逢はぬうち、寄つた

ぞや、く。額にその皺伸ばしに御出でか、アノこゝ

な、筵むしろ破りめが」

「イヤ由良殿、大功は細瑾さいきんを顧みずと申すが、人の謗

りも構はず遊里の遊び。大功を立つる基、天晴れの大丈夫、末頼もしう存ずる」

「ヤこれは堅いわく。石火矢と出かけた。さりとては置かれい」

「イヤ由良助殿、とぼけまい。まこと貴殿の放埒は」

「敵を討つ術と見えるか」

「おんでもない事」

「忝かたじけない。四十に余つて色狂ひ、馬鹿者よ、氣違ひよ

と、笑はれうかと思うたに、敵を討つ術とは。九太夫殿、ホ、嬉しい、く」

「スリヤ其元は、主人塩谷の仇を報ずる所存はないか」

「けもない事く。家国を渡す折から、城を枕に討死と言ふたのは、ありや御台様への追従つしよつう。時に貴様が、

上へ対して朝敵同然と、その場をついと立つた。我等は後に、しやちこ張つてゐた。いかいたはけの。所で

仕舞は付かず、御墓へ参つて切腹と、裏門からこそ／

く。今この安樂な楽しみするも貴殿のお陰。昔のよしみは忘れぬ、忘れぬ。堅みを止めて、コリヤ砕けをれく」

「いか様、この九太夫も昔思へば信太しのだの狐」

「クワイ」

『化け頭はして一献酌まうか畜生めハ、、、、』

「サ、由良殿、久しぶりだ御盃」

「また頂戴と会所めくのか」

「差しをれ、飲むわ」

「飲みをれ、差すわ」

「ちやうど受けをれ肴をするわ」

と、傍に在りあふ蛸肴、挟んでずつと

「手を出して、足を戴く蛸肴たこひかな。忝い」

と戴いて喰はんとする手をちつと捕へ

「コレ由良助殿、明日は主君塩谷判官の御命日。取分け速夜たいやが大切と申すが、見事その肴、貴殿は食ふか」

「食べる／＼。但し主君塩谷殿が、蛸たこになられたといふ便宜びんぎがあつたか、エ愚痴な人ではあるわい。こなたや俺が浪人したのは、判官殿が無分別から。スリヤ恨みこそあれ精進する気、微塵もござらぬ。御志の肴、賞翫致す」

と、何気もなくたゞ一口に味はふ風情、邪智深き九太夫も、呆れて

「サテこの肴では飲めぬ／＼。鶏締めさせ鍋焼きさせん。其元も奥へ御出で。女郎共、歌へ、／＼」

「足元もしどろもどろの浮拍子」

『テレツクテレツクツ、テンテン。おのれ末社共まじや、めれんになさで置くべきか』

と、騒ぎに紛れ、入りにける。

折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔ひ醒まし、早廓さど馴れて吹く風に、憂さを晴らしてゐる所へ

「ちよと往て来るぞや。由良助ともあらう侍が、大事の刀を忘れて置いた。つい取つて来るその間に、掛物も掛け直し、炬の炭もついで置きや。ア、それ／＼／＼、こちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太はもふ去なれたさうな」

あたり見廻し由良助、釣燈籠の明りを照らし、読む長文ながみは御台より敵の様子細々と、女の文の後や先、

参らせ候ではかどらず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見下ろせど、夜目遠目じしよなり字性もおぼ

ろ、思ひ付いたる延べ鏡、出して写して読み取る文

章、下家よりは九太夫が、繰り下ろす文月影に、透かし読むとは、神ならず、ほどけかゝりしおかるが

簪、バツタリ落つれば、下には『ハツ』と見上げて

後へ隠す文、縁の下にはなほ笑壺、上には鏡の影隠し

「由良さんか」

「おかるか。そもじはそこに何してぞ」

「わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに酔ひ醒まし。風に吹かれてゐるわいな」

「ムウ、ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる、ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは言はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか」

「話したいとは、頼みたい事かえ」

「マアそんなもの」

「廻つて来やんしよ」

「イヤイヤ、段梯子へ下りたらば、仲居が見つけて酒にせう。ア、どうせうな。ア、コレコレ、幸ひこゝに九つ梯子、これを踏まへて下りてたも」

と、小屋根に掛ければ

「この梯子は勝手が違うて、オ、恐。どうやらこれは危いもの」

「大事ない、く。危ない恐いは昔の事、三間づゝまたげても赤膏薬も要らぬ年配」

「阿呆言はんすな。船に乗った様で恐いわいな」

「道理で、船玉様が見える」

「ヲ、覗かんすないな」

「洞庭の秋の月様を、拝み奉るぢや」

「イヤモウ、そんなら降りやせぬぞえ」

「降りざ降ろしてやろ」

「アレまだ悪い事をアレアレ」

「喧やかましい、生娘か何ぞの様に、逆縁ながら」

と後より、ぢつと抱きしめ、抱き降ろし。

「何とそもじは、御覧じたか」

「アイ、いいえ」

「見たである、く」

「何ぢややら面白さうな文」

「アノ、上から皆読んだか」

「オ、くど」

「ア、身の上の大事とこそはなりにけり」

「何の事ぢやぞいな」

「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつて

たもらぬか」

「おかんせ、嘘ぢや」

「サ嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や、

く」

「イヤ、言ふまい」

「なぜ」

「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た、皆

嘘」

「おかる、請け出さう」

「エ、」

「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」

「イヤアノ、わしには」

「間夫があるなら添はしてやる」

「そりやマアほんかえ」

「侍冥利。三日なりと囲うたら、それからは勝手次

第」

「ハア嬉しうござんす、と言はして置いて笑おでの」

「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒らちさせう。

氣遣ひせずと待つてゐや」

「そんなら必ず待つてゐるぞえ」

「金渡して来る間、どつちへも行きやるな。女房ぢ

やぞ」

「それもたつた三日」

「それ合点」

「エ、忝うござんす」

「どりや、金渡して来うか」

「ア、騒ぐはく。さすがは花の祇園町、テモにぎわしいこつたなあ。ア、なんとやら、入相の鐘は廓の夜明けかな、とはよく言つたものだなアハ、ハ、ハ。それはさうとどうぞ首尾よう妹に逢ひたいもんだが、幸ひの女中、ちよと物が尋ねたい。この郭に山崎辺からかるといふ女が勤めに来て居る筈だが、御存知ならちよと教えてくれねえか」

「エ、何ちや知らぬが用があるなら勝手へ往て問うたがよいわいな」

「サア、さうは思つたが、勝手も何かゴタゴタと忙しさうだ。コレどうぞさう言はずと、御存知ならど

うか教えてくれる」

「エ、知らぬわいな」

「これはしたり、すげねえ女だな、マアさう言はずとちよと教えてくれる、御女中、どうか教えてくれる、わりや妹でねえか」

「エ、お前は兄様、恥しい所で逢ひました」と、顔を隠せば

「苦しくない、く。関東よりの戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。お夫の為、主の為、よく売られた。でかしたくくナア」

「さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しい。したがまあ喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」

「それは重畳。シテ何人のお世話で」

「お前も御存知の大星由良助様のお世話で」

「何ぢや、由良助殿に請け出される。それは下地からの馴染みか」

「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やると、モ結構過ぎた身請け」

「さてはその方を早野勘平が女房と」

「イエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」

「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存なねえに極まつたな」

「イエ、これ兄様、あるぞへ、」

「あるとは何が」

「サア、高うは言はれぬ。コレ、かう」と、囁けば

「待て、」

「ムウ、すりやその文確かに見たな」

「残らず読んだその後で、互ひに見合はず顔と顔。それからぢやらつき出して、つい身請けの相談」

「アノ、その文残らず読んだ後で」

「アイナ」

「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身どもにくれよ」

と、抜き打ちに、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、

「コレ兄様、わたしには何誤り。勘平といふ夫もあり、きつと二親あるからは、こな様のままにもなるまい。請け出されて親夫に、逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、許して下んせ、許して」

と、手を合はすれば平右衛門、抜身を捨て、

「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿

は六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」

「ヤア、それはマア」

「コリヤ、びつくりするな、びつくりするな。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」

「兄さん、勘平さんは」

「その勘平は」

「勘平さんは」

「勘平は、勘平で、やっぱり勘平だわい」

「コレ兄さん、勘平さんにはよい女房さんでも出来

たのかえ」

「エ、イ、そんな陽気な事ちやねえわい」

「そんなら兄さん、どうさしやんしたえ」

「その勘平はな、腹を切つて死んだわやい」

「エ、くく」

「ア、驚きは尤も、道理だく。ガこれには、何だ、

様子のある、ア、しまった、コリヤ妹が目を廻した、てつきりさうであらふと思ふた。誰かいねえか、誰か水を持つて来てくれる。待てのるな、のるな。幸いの手水鉢、ア、今水をくれるぞ。ソリヤ水だ。おかるやい、妹やい、気が付いたか、くく」

「オ、お前は兄さん」

「オ、兄だ、平右衛門だ、面を見ろくく」

「コレ兄さん、勘平さんはどうさしやんしたえ」

「エ、情けねえ、又尋ねるのかやい。その勘平はな、友朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」

「ヤアくくそれはマアほんかいな。コレのうのう」

と、取り付いて

「コレ兄さんどうせう」



「道理だ」

「どうせう」

「道理だ」

「どうせうどうせう、／＼ぞいなあ」

「オ、道理だ／＼。様子話せば長い事、お痛はしいは母者人、言ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣き死にするである、必ず言つてくれなどのお頼み。言ふまいとは思へども、とも遁れぬそちが命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、請け出だして刺し殺す思案の底と確かに見えた。よしさうのうても壁に耳、他より洩れてもその方が科、<sup>とが</sup>密書を覗き見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手に掛けよりわが手に掛け、大事を知つ

たる女、妹とて許されずと、それを功に連判の、数に入つてお供に立たん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば数には入れられぬ。聞き分けて命をくれ、死んでくれ、妹」

と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ、せき上げ

「便りのないは身の代を、役に立てゝの旅立ちか、暇乞ひにも見へそなものと、恨んでばかりをりました。勿体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平さんは／＼三十になるやならず死ぬるのは、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、何故逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、何の生きてをりませう。お手に掛からば母さんがお前をお恨みなされましよ。自害したその後で、首なりと死骸なりと功に立つな

ら功にさんせ。さらばでいづる兄さん」

と、言ひつゝ刀取り上ぐる

「ヤレ待て暫し」

と止むる人は由良助、『ハッ』と驚く平右衛門、おかるは

「放して殺して」

と、焦るを押へて、

「ホウ、兄妹とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を許す。妹はながらへて、未来への追善」

「サア、その追善は冥途の供」

と、もぎ取る刀をしつかと持ち添へ、

「夫勘平連判には加へしかど、敵一人も討ち取らず、未来で主君に言訳あるまじ。その言訳はコリヤこゝに」

と、ぐつと突込む畳の隙間、下には九太夫肩先縫は

れて七転八倒、

「それ引き出だせ」

の、下知より早く平右衛門、朱に染んだ体をば無二無三に引き摺り出し

「ヒヤア九太夫め、ハテ良い気味」

と引立てゝ、目通りへ投げ付くれば、起き立たせもせず由良助、髻こむぎ掴んでぐつと引き寄せ

「獅子身中の虫とは儂おのれが事。我が君より高知を頂き、莫大の御恩を着ながら敵師直が犬となつて、ある事ない事よう内通ひろいだな。四十余人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連れ添ふ女房を君傾城の勤めをさするも、亡君の仇を報じたさ。寢覚めにも現うつにも、御切腹の折からを思ひ出しては無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。取り分け今宵は殿たいやの逮夜、口に諸々の不浄を言ふても、慎みに慎みを重ねる由良

助に、よう魚肉を付き付けたなア。否と言はれず応  
と言はれぬ胸の苦しき。三代相恩の主君の逮夜に、  
喉を通したその時の心、どの様にあらうと思ふ。五  
体も一度に悩乱し、四十四の骨々を砕くる様にあつ  
たわやい。チエ、獄卒め、魔王め」

と、土に摺り付け捻ぢ付けて、無念涙にくれけるが  
「ソレ平右衛門、喰らひ酔うたその客に、加茂川で  
ナ」

「いかゞ計らひませうか」

「水雑炊を喰らはせい」

「ハ、ア」

「行け」

「ヤ、シテコイナ」